

宮城信雄先生を偲んで

わんぱくクリニック 呉屋 良信



昨年12月に入ってからすぐに、県医師会から寄稿文の依頼が届きました。テーマ（趣味・紀行文・行きつけの店等々）は自由ということで、このコロナ禍で趣味もなく、旅行もせず、行きつけの店もなくなった昨今、何を書いていいやら困っていました。丁度その頃、県医師会報誌10・11月合併号に、宮城信雄先生を偲んで追悼文が多数寄せられていました。安里哲好県医師会会長が宮城先生の業績を掲載され、圧倒されました。江夏力先生は高校～大学～開業当初の思い出を、照屋勉先生がプライベートで泡盛が大好きな信雄先生との思い出や訓示などについて、思いのたけを書き綴られていました。

私は、諸先輩方ほど宮城先生と深くお付き合いさせていただいているわけではありませんが、毎月班会でのお話を通して、小児科以外の開業医で最も影響を受けた宮城先生への尊敬の念は深く、今回会報誌へ私の思いを投稿させていただきます。

宮城信雄先生に初めてお会いしたのは、平成9年（1997年）4月か5月の南部地区医師会の南風原・八重瀬班会議で、私が開業して初めて参加した班会でした。宮城先生はまだお若かったのですが、南風原八重瀬班でも2番目に古い会員として存在感があり、私のような新米の開業医にもとても丁寧な口調でお話されました。宮城先生が開業した当初は近隣に小児科医がいなかったため、内科なのに小児の患者さんが多数受診されていたそうです。「開業当初、最初の患者さんは赤ちゃんでしたよ。」とおっしゃっていました。また、「髄膜炎疑いや腸重積疑いの小児を診察した際には、紹介先の救急医が小児科医かどうかを確認して、内科や外科の医師であれば必ず小児科医に連絡を取ってか

ら紹介していましたよ。」とアドバイスしていただきました。当時は小児科医が少なく、内科や外科の先生方も当直で担当することが多々あったようで、自分が信頼できる病院や医師に紹介することが大事だとお話しされていました。ご専門は透析で成人（特に高齢）の患者さんが中心でしたので、私の10年前に野原薫先生が近くで小児科を開業されてから小児の患者さんが減り、本来の内科の患者さんをしっかり診る事が出来るようになったとおっしゃっていました。

それから、「開業医は風邪を引いたらダメです。患者様に迷惑をかけないように日頃から自己管理をして、決められた診療日・診療時間に穴を空けることがないよう務めて下さい。」と、開業医としての心構えを教わりました。

宮城先生はご自分の診療だけでなく、南部地区医師会や県医師会など医師会活動にも積極的に参加されました。ご存じのように南部地区医師会会長を2期4年、県医師会会長を6期10年、全国医師国保組合連合会会長を2期4年努めていました。これだけ忙しい宮城先生ですが、毎月の班会へは医師会などの会議が重なっていなければ必ず出席しており、時には会議終了後に出席することもありました。口癖は、「医師会活動の原点は、班会です。班会で議論したことが地区医師会で吸い上げられ、県医師会へと繋がります。ひいては日本医師会にあげていかなければなりません。だから私は、班会に可能な限り出席しているのです。呉屋先生達も、ぜひそのような心づもりで班会において侃々諤々の議論をし、南部地区医師会を盛り上げてください。」でした。

他に、宮城先生と言えば「ランニング依存症」

が疑われていました。「100キロマラソン」のエピソードを話し出すと止まりません。「走り終えた後のビールや泡盛・日本酒がどれだけ美味しいか、そのために走っているようなものです。」、その話を聞いて運動が苦手でお酒も弱い私ですが、「ウォーキングなら出来そうだ、その後ビールを一缶飲んでみようか。」などと思いました。

「何事も突き詰めて深く考え、一度決めたら徹底して行動に移す。」私の抱く宮城信雄先生のイメージです。私はというと、何も考えずに、思いついたことをすぐ行動に移すタイプで、失敗してからいつも反省ばかりですが、身につかないので未だに何度も同じ過ちを繰り返しています。そんな素敵な宮城先生ですが、医政活動の話においては私と意見が対立することも多く、度々「侃々諤々」の議論となりました。私も血気盛んな40代でしたので、医療制度の裏もよく知らずに私なりの正論ばかりをぶつけていました。そんな私の生意気な意見をしっかり聞き取って、一つ一つ丁寧に論してくれました。どんなに議論を戦わせても、最後は宮城先生の手のひらで踊らされているようでしたが、いつでも受けて立ってくれる懐の深い先生でした。

その宮城先生の突然の訃報を南部地区医師会の回覧メールで知り、診療中だったのですが驚愕したのを覚えています。この2年近くは新型コロナ流行のため班会もほとんど開催されず、お会いして話す機会もなかなかありませんでした。いつか班会が再開されても、宮城先生から色々なお話を伺ったり、私の稚拙な考えをぶつけたりすることが出来なくなり、とても残念です。

私が開業して県医師会・南部地区医師会の会員になってからもうすぐ25年ですが、この間、

民間医師と県及び国立病院医師の垣根はかなり低くなってきたことを肌で感じています。そのことが、新型インフルエンザや新型コロナウイルスのパンデミック時の対応に生きてきていると思います。「顔の見える病-診連携・病-病連会がとても大切です。」これも、宮城先生がよくおっしゃっていた言葉です。新型コロナウイルス感染流行の第5波では医療逼迫が1ヶ月以上続きましたが、県立病院・国立病院・県医師会（民間病院・開業医）と県や保健所の連携が比較的スムーズに行われ、ベッドや人手の空き状況が一目で分かる情報共有もなされており、医療崩壊までには至らなかったとの認識だったようです。これも県医師会や宮城先生がリードして、沖縄県内の各医療界の風通しを良くするよう尽力した蓄積の賜ではないかと思います。

オミクロン株による第6波が令和3年の年末から始まり、令和4年1月8日には、沖縄県で過去最高の1日1,759人の新型コロナウイルス新規感染者が発生しました。これは東京都の人口換算で1日16,848人、全国の人口換算では1日に151,206人の新型コロナウイルス新規感染者が発生することになります。第5波の何倍ものスピードで感染拡大を続ける新型コロナウイルスに対し、1月9日から「まん延防止等重点措置」が沖縄県に発出されました。「こんな時こそ、『恐れず怯まず侮らず』、沖縄県の全医療者が力を結集し、一致団結してこの難局に立ち向かいましょう。沖縄なら必ず乗り越えられるはずですよ。」宮城信雄先生は、きっと天国からこうおっしゃりながら見守ってくれていると思います。

心からご冥福をお祈りいたします。 合掌

